

## マンガを核に据えるフランスのカトリック系出版社の試み

豊永 真美<sup>1</sup>

### Placing “Manga” at the Core of the Business – A Case Study of a French Catholic Publishing Company – TOYONAGA Mami

#### 1. はじめに 2023 年のフランスのマンガ市場～減少はしたものの高水準～

フランスのマンガ市場はコロナ禍で売り上げを伸ばし、2021 年<sup>2</sup>に部数ベースで前年比 2.1 倍増となり、初めてフランスのマンガであるバンド・デシネの売り上げを上回った。2022 年もフランスのマンガ市場は部数ベースで前年比 2% 増の 4800 万部と伸びた<sup>3</sup>。一方、2023 年は減少した。調査会社 GfK が発表した資料<sup>4</sup>によると、2023 年のフランスのマンガの販売部数は 3960 万部で、前年比 18% 減となっている。それでも、マンガの販売部数はフランスの従来型のバンド・デシネより多く、高水準を保っている。マンガ市場がフランス市場の中で大きな役割を果たしていることは間違いない。

一方、日本で主流となりつつある電子コミックは、フランスではタイトル数は増えたものの、人気爆発とはいかなかったようだ。日本では 2019 年以降電子コミックが紙媒体を逆転していることと対照的な状況となっている。

紙のマンガ市場が好調であることから、日本の中でも、フランス市場に真剣に興味を持つ企業が出てきている。

#### 2. KADOKAWA がフランスの大手出版社 Media Participations と子会社設立で合意

2024 年 1 月 25 日、日本の大手出版社 KADOKAWA がフランスのマンガ出版社、Media Participations Paris (メディア・パルティシパシオン・パリ、以下 MP) および MP グループ傘下のコミック出版社 Dupuis (デュブイ以下 D 社) との間で合弁会社を設立予定とのリリースが発表された。具体的には、D 社の既存出版レーベルの VEGA を分社化し、VEGA の株式の 51% を KADOKAWA が、49% を D 社が取得すると発表された。日本企業が自らフランスに子会社を設立するのは、小学館・集英社が VIZ Media Europe (ヴィズ・メディア・ヨーロッパ、以下 VIZ) を 2007 年に設立して以来のことである。VIZ は

---

<sup>1</sup> 昭和女子大現代ビジネス研究所研究員

<sup>2</sup> 2022 年以前の動向については豊永 [2023 他] 参照のこと

<sup>3</sup> GfK “85 millions de BD & Mangas vendus en 2022 (2022 年はバンド・デシネとマンガ、合わせて 8500 万部が売れた) 2023 年 1 月 26 日発表 <https://www.gfk.com/fr/press/85-millions-bd-manga-vendus-en-france-2022>

<sup>4</sup> GfK “75 millions de BD-Mangas vendus en 2023 (2023 年はバンド・デシネとマンガ、あわせて 7500 万部が売れた) 2024 年 1 月 24 日発表 <https://www.gfk.com/fr/press/75-millions-bd-mangas-vendus-en-france-2023>

2009 年にフランスのマンガ専門出版社 KAZE を買収し、週刊少年ジャンプの複数の人気タイトルを出版するなど一時期勢力を拡大したが、KAZE が VIZ 傘下となったところ、フランスのマンガ市場は停滞した。マンガを読者に届けるためには、売り場の確保が重要だが、歴史が浅い KAZE は書店の棚が十分確保できなかったためともいわれている。VIZ は 2019 年にソニーの傘下で米国の日本アニメ事業者 クランチ・ロールに株式を売却している。

KADOKAWA はライトノベルも強い企業であり、小説の仏語訳出版も視野に入れている。2023 年には川口俊和の『コーヒーが冷めないうちに』（サンマーク出版）の仏語訳本が 36 万部を売り上げて<sup>5</sup>注目を浴びた。日本の小説に海外市場の開拓の余地があることが認識されており、KADOKAWA がどのようなタイトルをフランスに出していくかが注目される。

### 3. 出版社メディア・パルティシパシオンとは<sup>6</sup>

今回、KADOKAWA と業務提携をした MP はアシェット、エディティスに次ぐ第 3 位のグループである。D 社は MP のグループ企業の一つであり、MP グループには 2004 年に参画した。

フランスの出版界はさほど大きくない出版社が集まってグループ体を形成している。日本でも、音羽グループ、一ツ橋グループといった出版グループがあるが、フランスの場合は老舗の出版社が投資対象として売買され、独立系企業がグループに買収されたり、あるグループ傘下の企業が別のグループ傘下の企業となることがしばしば行われる。

MP とそのグループ企業をみると、MP は設立が 1986 年だが、傘下の D 社の設立は 1898 年である。同じく、グループの主要企業でバンド・デシネ出版の Dargaud (ダルゴー) の設立は 1943 年となっている。

さらに、MP は 2017 年に中堅出版グループの La Martinière (ラ・マルティニエール) を買収しているが、ラ・マルティニエールの傘下の Seuil (スーユ) は 1935 年の設立で、ロラン・バルトやピエール・ブルデューなどの著作を出版するフランスの人文・社会科学の名門出版社である。

このように、自社より古い歴史を持つ出版社を傘下に持つ MP だが、売上の中心をなすのがバンド・デシネ部門であり、売上の 3 割<sup>7</sup>を占めるといわれている。日本のマンガ出版は主に KANA というレーベルのもとで出版されている。

だが、MP はそもそもバンド・デシネを目的として設立された出版社ではなかった。1986 年に MP を設立したレミー・モンターニュ (Remy Montagne、以下レミー) は 1916 年生まれで保守党の国会議員を長く務めた。妻はタイヤのミシュラン家出身である。

---

<sup>5</sup> GfK “Meilleures ventes de livre 2023: BD et romans feel-good au top” (2023 年のベストセラー: バンド・デシネとフィール・グッド小説がトップに) 2023 年 12 月 28 日

<https://www.gfk.com/fr/press/meilleures-ventes-livres-2023>

<sup>6</sup> 本稿は豊永真美 「マンガはなぜ赦されたのか -フランスにおける日本のマンガ- 第 4 回「カトリック出版とマンガ出版の関係」(2015 年 4 月 12 日) <https://animeanime.jp/article/2015/04/22/22961.html> を大幅に加筆したものである。

<sup>7</sup> MP は非上場企業であり、正確な数字は発表されていない。

既に 70 歳という高年齢で MP を設立したレミーには、出版社設立の明確な目的があった。フランスのカトリック出版を救うことである。1981 年、政界引退直後に、Groupe Ampere (グループ・アンペール) というキリスト教出版社を集めた出版グループを設立した。

レミーは熱心なカトリック信者であり、妻の実家のミシュラン家は、フランスの代表的なカトリックの家族企業である。ところが、フランスは、第二次大戦後、政教分離政策をさらに強めており、特に 1980 年代に入り、信者数は激減していた。あるアンケート調査によると、フランス国民でカトリック教徒と答えたのは、1981 年には 70.5%だが、1990 年には 57.6%に激減、その後も減少を続け、2018 年には 32.2%まで落ち込んでいる<sup>8</sup>。

そのような社会の中で、フランスおよび欧州のフランス語圏 (ベルギー、スイス) のカトリック出版を守るべく、レミーはグループ・アンペールを設立し、雑誌「Famille Chretienne (ファミリー・クレティエンヌ、キリスト教家族の意味)」をはじめ、キリスト教の価値観を担う出版物を出版する企業を集めた。しかし、キリスト教出版だけでは、企業の存続は難しい。このため、収益部門として、バンド・デシネの企業を買収することとした。

まず 1986 年に、日本でも知られるベルギーのバンド・デシネのキャラクター「Tintin (タンタン)」の権利をもつ Le Lombard (ル・ロンバル) 社を買収した。次に 1988 年に「Asterix (アステリックス)」の権利を持つダルゴーを買収する。

ところが、ダルゴーで最も人気のある「アステリックス」の作者 Albert Uderzo (アルベール・ウデルゾ) がすでに死亡していた共同作者の René Goscinny (ルネ・ゴッシーニ) の遺族とともに、海外利益の分配が不十分としてダルゴーを 1989 年に訴える。裁判の結果 1993 年 12 月にダルゴーは作者に 500 万フランの支払いと、「アステリックス」シリーズ既刊 25 巻の著作権を作者に返すこととなった<sup>9</sup>。大型買収早々に MP は苦難に直面することとなった。

#### 4 レミーの死後、息子のヴァンサン・モンターニュが MP グループのリーダーに

ダルゴー社のアステリックス裁判中の 1991 年にレミーは死去する。MP グループの会長には息子のヴァンサン・モンターニュ (1959 年生まれ、Vincent Momtagne 以下ヴァンサン) が就任した。ヴァンサンは就任時、まだ 32 歳に過ぎなかったが、カトリックの価値を守らなくてはならないという父の信念をしっかりと受け継いでいた。

まずは MP の経営基盤を強化することが急務だった。1992 年にはバンド・デシネの人気

---

<sup>8</sup> Des croyances et pratiques religieuses en déclin en France (フランスの信仰と宗教行動 Centre d'observation de la Societe 2021 年 11 月記事) <https://www.observationsociete.fr/modes-de-vie/des-croyances-et-pratiques-religieuses-en-declin-en-france/>

<sup>9</sup> Les Echos Le dessinateur Uderzo enlève à Dargaud le droit d'éditer « Astérix »(漫画家 Uderzo ダルゴーから「アステリックス」の著作権を取り上げる) (1998 年 9 月 10 日) <https://www.lesechos.fr/1998/09/le-dessinateur-uderzo-enleve-a-dargaud-le-droit-dediter-asterix-798415>

シリーズ **Blake et Mortimer** を出版する **Éditions Blake et Mortimer** を買収、また、タンタンのアニメを手掛けるアニメ製作企業 **Citel** 社も買収した。

フランスのバンド・デシネのビジネスは、息の長いキャラクターを主人公とする新作を毎年出すことにより成り立つ。人気シリーズのアステリックスを失うと、売上の損失ははかりしれない。このため、MP は新しく経営の柱になる部門が必要であった。

## 5. マンガの出版のきっかけ

ダルゴーの本を多く扱っていた書店の店主イブ・シュリフ (**Yves Schlirf**) はアジアのマンガに大変興味をもっており、ベルギーの首都のブラッセルで経営する書店には日本のマンガ雑誌を置いていた。

1996 年にシュリフは MP を説得して **KANA** というマンガ部門を立ち上げた。一番最初に取り扱った作品は著作権の安い韓国作品だったという。

もちろん、本命は日本のマンガである。**KANA** は 2016 年に、自社のホームページで 20 年の歴史を振り返る記事を公表したが、その記事によると、1996 年、シュリフは集英社との面談のために訪日した。MP 傘下の企業ということで、著作権をとるのは容易と思っていたシュリフだったが、集英社からは良い返事はもらえなかった。最後にシュリフは自身が経営する書店で日本のマンガ雑誌を取り扱っていることを紹介した日本の雑誌の記事を見せると、集英社の担当者の反応が変わった。シュリフが日本のマンガを本当に好きであることがわかったためだという。こうして、**KANA** は『聖闘士星矢』の著作権を手に入れることができたという<sup>10</sup>。

『聖闘士星矢』の著作権を手に入れた後は、その評判が日本で広がり小学館で『名探偵コナン』と『幽遊白書』の著作権を手に入れることができたこと、**KANA** のホームページには記されている<sup>11</sup>。当時シュリフは小学館がどのような作品を出版しているかについて知らず、カタログに記載されている順位の高い作品を選んだということまで、ホームページに記載されている。

ともあれ、マンガのビジネスは比較的順調に推移し、MP の経営を支える柱に育っていった。特に、**KANA** の飛躍のきっかけとなったのは、2002 年に『**NARUTO**』の著作権を得たことである<sup>12</sup>。『**NARUTO**』に関して特筆すべきなのは、フランス語版のアニメの窓口ともなったことである。これは、**KANA** によると、欧州企業で初めてのことであるという。

**KANA** は 2006 年に「**KANA HOME VIDEO**」という日本のアニメを手掛ける企業を設立している。アニメの著作権の中には『**ONE PIECE**』など、**KANA** 以外の出版社が出版

---

<sup>10</sup> **KANA** : 20 ANS D'HISTOIRE – PARTIE 2/11 (**KANA** : 20 年の歴史 第 2 回 (全 11 回) 2016 年 3 月 2 日) <https://www.kana.fr/kana-20-ans-dhistoire-partie-2-11/>

<sup>11</sup> **KANA** : 20 ANS D'HISTOIRE – PARTIE 3/11 (**KANA** : 20 年の歴史 第 3 回 (全 11 回) 2016 年 4 月 12 日) <https://www.kana.fr/kana-20-ans-dhistoire-partie-3-11/>

<sup>12</sup> **KANA** : 20 ANS D'HISTOIRE – PARTIE 5/11 (**KANA** : 20 年の歴史 第 5 回 (全 11 回) 2016 年 6 月 1 日) <https://www.kana.fr/kana-20-ans-dhistoire-partie-5-11/>

する作品も含まれている。

MP はタンタンのアニメの権利も持っており、映像ビジネスも手掛けているため、こうした展開が可能だったと考えられる。MP はマンガだけでなく、アニメの世界でもフランスで日本のコンテンツを手掛ける会社として認知されていった。

ただし、VIZ がフランスに本格参入した 2000 年代後半から、KANA は週刊少年ジャンプの新たな人気連載を殆ど出版していない。これは、集英社が KAZE での出版を優先したあと、2010 年代半ばからは、出版社を分散する戦略をとっているからである。このため、『鬼滅の刃』はパニーニ、『僕のヒーローアカデミア』、『呪術廻戦』は Ki-oon と規模の小さい会社がヒット作品を手掛けることとなった。一方、KANA は、この文代『この世界の片隅に』、浦沢直樹『あさドラ！』などの秀作を手掛けている。統計が入手できる 2019 年時点の状況では、KANA はフランスのマンガ市場で 3 番手の位置となっている。

(表 1) フランスのマンガ市場—主要出版社別マンガ市場のシェア (%) (金額ベース)

	2014	2015	2016	2017	2018	2019
グレナ	23.0	22.9	21.0	21.7	22.4	23.9
ピカ	18.2	19.5	17.8	16.5	15.3	13.4
KANA	16.3	14.8	14.5	13.6	12.9	12.5
Ki-oon	8.7	8.6	9.3	8.9	9.8	12.2
クロカワ	7.5	8.0	9.7	9.2	8.5	8.5
カゼ	5.7	5.1	5.6	6.2	6.5	7.4

出典：Centre National du Livre [2021]

KANA の存在感が大きいのはフランスでの日本のアニメの配給・配信の分野だ。2013 年に当時、VIZ が有していた KAZE と共同で ADN (Anime Digital Network) という日本アニメの配信プラットフォームを立ち上げた。2022 年に KAZE がソニー系のクランチロールに買収されたとき、ADN もクランチロールと MP の共同所有となったが、2023 年にクランチロールは ADN を MP に譲渡した。

KANA は新しい形での日本との協業を図っているように見える。例えば、2021 年 10 月には、作者永井豪の許可を得て、フランスでテレビアニメとして絶大な人気を誇った『ゴルドラック (UFO ロボグレンダイザー)』をフランス人作家によりバンド・デシネ化した。

これはフランスで 19 万部を売り上げるヒットとなった<sup>13</sup>。

アニメ部門でも日本との協業を探っている。ADN は 2023 年に東映アニメーションとの合作プロジェクトを発表した。『Le Collège Noir (黒い中学)』というタイトルのアニメだが、原作はフランスのバンド・デシネである<sup>14</sup>。

一方、MP は KANA 以外のマンガ部門を立ち上げた。2018 年に創業した新しいマンガレーベル VEGA を 2020 年に D 社が買収したのだ。VEGA はグレナの編集者が立ち上げたレーベルで、東元俊哉『テセウスの船』などの作品を仏訳していた。D 社はベルギーの 1936 年創業の老舗のバンド・デシネの出版社であり、Spirou というベルギーの代表的なバンド・デシネの雑誌を出版していた。日本のマンガとは一線を画すとみられていたが、VEGA を買収、新たにマンガの世界に入ることとなった。そして、この VEGA の株式の 51%を KADOKAWA が取得したところである。

## 6. マンガ以外にも拡大する MP グループ

MP はマンガ出版以外にも業績の拡大を狙っていた。MP は非上場で社長のヴァンサン・モンターニュが株式の 70%を保有する会社である。また、他の株主もミシュランや AXA などフランスを代表するカトリック系の企業であり、資金も潤沢であった。

MP は 2004 年と 2008 年にフランス第 2 の出版グループのエディティスを買収しようとした。エディティスはフランス第 1 位の出版グループのアシェットが、ヴィヴァンディ (Vivendi) の出版グループ (旧 Havas の流れをくむ) を買収しようとした時、独占禁止法の観点から、買収が認められなかった部門が独立してできたフランス第 2 位の出版グループである。2004 年には Wendel Investment、2008 年にはスペインの Grupo Planeta が買収し、MP の買収はかなわなかった<sup>15</sup>。エディティスはその後 2019 年にヴィヴァンディに再買収された。

その中で MP は Smurf、Gaston Lagaffe など人気シリーズを持つ Dupuis (D 社) を買収した。MP はすでにダルゴーを持っていたが、D 社は 1898 年創業の老舗であり、ダルゴーと D 社をともに存続させる形でグループ内に置いた。ただし、バンド・デシネの流通については同じグループにいるというシナジー効果を狙った。フランスのバンド・デシネ市場は、クリスマスの時期の売り上げが大きく、その時期に書店の棚を押さえていることが売り上げにつながる。MP は二つの大きなレーベルでバンド・デシネの棚を押さえることに成功した。

---

<sup>13</sup> Le Parisien 2022 年 1 月 23 日記事「なぜゴルドラックは驚きのカムバックを果たしたのか (BD : pourquoi Goldorak a fait un retour fulgurant) <https://www.leparisien.fr/culture-loisirs/livres/bd-pourquoi-goldorak-a-fait-un-retour-fulgurant-13-01-2022-DDMWTTWTU5EQLFOLBX6ZJS4PVE.php>

<sup>14</sup> 東映アニメーション「新作アニメ『Le Collège Noir (原題)』を仏スタジオのラ・カシェット、配信大手の ADN と共同製作。映像販売と商品化権も取得し、欧州発のコンテンツ展開へ」<https://corp.toei-anim.co.jp/ja/press/press-3447382847798775292.html>

<sup>15</sup> EDITIS ホームページ Notre Histoire (私たちの歴史) <https://www.editis.com/a-propos-deditis-2/notre-histoire/>

日本のマンガ以外のマンガにも目を向けている。2012 年にはアメコミ（アメリカのコミックス）の DC の仏訳を手掛ける Urban Comics を立ち上げた。

また、2004 年よりミシュランのガイドブック部門との協業を強め、地図・ガイドブック、ガストロノミーの分野で存在感を増している。

さらには、前述のとおり、2017 年には社会科学系の出版グループ、ラ・マルティニエールを買収し総合出版社としての地位を固めている。

## 7. 社会的地位を固めるヴァンサン

MP の出版界での地位向上とともに、MP の社長を務めるヴァンサンも社会での役割を増やしている。

カトリック関係では 2017 年よりフランスのカトリック系ラジオ局の KTO<sup>16</sup>の社長を務める。また、2021 年より、ミシュラン社の経営アドバイザリーボードの役割を務める SAGES の会長<sup>17</sup>も務めている。

出版界でも発言力を強めている。2012 年より、フランス出版社協会（Syndicat national de l'édition）の会長を務めている<sup>18</sup>。2020 年には、出版社協会会長として、コロナ時のロックダウンに「エッセンシャル（必要不可欠）」な事業として書店を認知させた。フランスでは、2020 年の 3 月、11 月と 2021 年 4 月と計 3 回のロックダウンが行われたが、2 回目のロックダウン以降、書店は開店してもよいエッセンシャルな事業として認知され、あらかじめ注文した書籍をピックアップすることは許可された。

また、2023 年には、ヴィヴァンディグループを率いるフランスの投資家ボロレが、エディティスを売却し、アシェットを買収をした。エディティスはチェコの投資家に売却され、フランスの出版界は大きな変化を迎えている。そのような変化の時代のかじ取りを担う役割を、ヴァンサン・モンターニュは出版社協会会長として担っている。

## 7.カトリック企業がマンガ出版社を有しているという意味

MP はフランスのカトリック出版を守るために設立され、バンド・デシネやマンガ部門への参入は当初はカトリック出版を守るための利益を確保するためのものであった。MP にとって、現在、マンガはアニメとともに収益を支える柱となっている。マンガやアニメを取り扱うことは MP にとってもはや必要不可欠となっている。

一方、カトリック系出版社がマンガを扱ったことはどのような意味もつのかを考えてみたい。MP はマンガを取り扱った当初から、マンガは道徳的に悪いことではないというこ

---

<sup>16</sup> KTO ホームページ <https://www.ktoradio.com/>

<sup>17</sup> ミシュランホームページ The Michelin Governance（ミシュランのガバナンス）  
<https://www.michelin.com/en/michelin-group/governance/michelin-governance/>

<sup>18</sup> Syndicat national de l'édition ホームページ Vincent Montagne, réélu Président du Syndicat national de l'édition（ヴァンサン・モンターニュ、SNE の会長に再選）  
<https://www.sne.fr/actu/vincent-montagne-reelu-president-du-syndicat-national-de-ledition/>

とを強調している。

KANA の 20 周年を振り返ったウェブの記事で、KANA の Christel Hoolans (現 KANA CEO) は『Hunter×Hunter』を売り出した 2000 年ごろを振り返り、次のように語っている<sup>19</sup>。「良識のある」というある保護者会から、『Hunter×Hunter』は幼い子供たちに一生のトラウマを植え付けるものであり、それを売り出すのはスキャンダルであるという手紙が届いたことを覚えている。(Je me souviens qu’une association de parents soi-disant « bienveillante » nous avait envoyé une lettre en disant que Hunter X Hunter allait traumatiser les jeunes enfants à vie, que c’était un scandale de le commercialiser.)」

2000 年ごろはフランスにおいて、保護者にあたる世代にマンガの価値は十分に理解されおらず、KANA はそうしたマンガに反対する立場の保護者と根気強く対話を続けることとした。

そして、保護者の不安を取り除く一環として、『Death Note』を出版するときには「Kana Dark」という通常のレーベルとは異なるレーベルで売り出した。KANA は日本では、この「Dark」というカテゴリーは存在しないが、マンガが乱暴すぎると思っている保護者がわかるようにカテゴリー付けをしたと語っている。

日本では『NARUTO』も『Death Note』も同じ週刊少年ジャンプの連載作品であり、ことさらに『Death Note』が子どもに悪影響を与えるとは考えられていない。しかし、KANA は「フランスにマンガが受け入れられる」ために、敢えてカテゴリー付けをしている。

MP はカトリック出版社として「道徳的」な価値観をもっており保護者を説得するという役割はうってつけだったのかもしれない。

MP の会長のヴァンサン・モンターニュはフランス出版社協会の会長の立場で、マンガを擁護したこともある。2021 年に若者が書籍等を購入できる「文化クーポン」が導入されたとき、マンガの購入が増えたことから、このクーポンは「マンガクーポン」ではないかという批判があった [豊永 2022]。これに対しヴァンサンは、2023 年のフランス出版社協会の年頭あいさつで、「マンガの影響は大きいですが、ISBN ベースで 25 万種類もの本が売れた」と出版業界全体にポジティブな影響を与えていると語っている<sup>20</sup>。

## 8. まとめ—「フランスのマンガ市場の発展」を意識する MP

MP の歩みは、フランスのマンガ市場の発展と軌を一にしている。MP がマンガに参入したのは、MP 設立から 10 年後であるが、マンガレーベルの設立後、MP は大きく成長してきた。

---

<sup>19</sup> KANA : 20 ANS D’HISTOIRE – PARTIE 2/11 (KANA : 20 年の歴史 第 4 回 (全 11 回) 2016 年 5 月 1 日) <https://www.kana.fr/kana-20-ans-dhistoire-partie-4-11/>

<sup>20</sup> フランス出版協会“Vincent Montagne présente ses vœux pour 2023 (ヴァンサン・モンターニュの 2023 年の年頭あいさつ) <https://www.sne.fr/actu/vincent-montagne-presente-ses-voeux-pour-2023/>

MP の特徴は、「マンガ」というジャンルを意識し、フランスおよび仏語圏で「マンガ」を宣伝してきた。当初、日本の出版社はフランスに作品を出すことに消極的で、フランスで「マンガ」というジャンルを宣伝したのは、もっぱらフランスの出版社であった [豊永 2019]。

マンガは、フランスにとって未知のジャンルで、日本アニメは暴力的と批判されてきた経緯もあり、保護者や一部の保守派からは好意をもって見られてこなかった<sup>21</sup>。学術的な世界でも、日本のアニメやマンガに対し、疑義を持つ視点も少なくない。フランス出身で、現在は米国の大学で教鞭をとるトマス・ラマールの 2018 年の著書『アニメ・エコロジー』は日本のアニメとそれをとりまく生態学についてフェアに書かれた論文だが、そのような本でも、第 1 章で取り上げているのは「ポケモン・ショック」、すなわち 1997 年 12 月 16 日におきた、アニメ『ポケット・モンスター』を見て、約 700 人の子どもが光過敏性てんかん発作を起こした事件である [ラマール 2023]。

日本のマンガやアニメへの批判に対し、「日本のマンガやアニメは悪いものではない」と対話を積極的にしてきたのが MP である。MP は「カトリック」ということを全面的に出す出版社ではなく、また、フランス人の多くも「カトリック」だから信用するという社会ではないが、それでもカトリックの出版社がマンガを扱うことにより、信用はあがったと推測される。

MP がマンガを扱うようになったのは、バンド・デシネを扱ったことに端を発するが、創業者のレミー・モンターニュも息子のヴァンサン・モンターニュもマンガに知見があったわけではない。それでも、マンガを扱うからには、マンガがフランスの出版界、ひいてはフランス社会に受け入れられるように、努力している。そのことは、日本のマンガにとって、幸運だったと考えられる。

MP より規模の大きいアシェット、エディティもそれぞれマンガを出すレーベルを持っており、大きなタイトルも出しているが、この 2 グループは、規模も大きく、マンガに経営を頼っているわけではない。またグループとして、ここ 20 年以上、買収・売却の対象となっており、グループとして、あるいは出版業界全体としての理念を出しにくくなっている。

モンターニュ家という理念を持った家族がリーダーとなっている MP は、出版界としても意見を出しやすい立場にあった。MP は「マンガが嫌いな人にマンガの存在を許してもらおう」という働きかけを行い、成果を上げた。このことはもっと注目されてもよい。

#### <参考文献>

豊永真美 (2019) 「フランスでマンガ市場を切り開く—異色出版社キューン社のケーススタ

---

<sup>21</sup> 2015 年までのフランスのマンガ・アニメ批判については、豊永真美 「マンガはなぜ赦されたのか - フランスにおける日本のマンガ- 第 1 回 「はじめにアニメありき」 (2015 年 4 月 12 日) [https://animeanime.jp/article/2015/04/12/22832\\_2.html](https://animeanime.jp/article/2015/04/12/22832_2.html) 参照のこと。

ディ』『昭和女子大学現代ビジネス研究所 2018 年度紀要』

豊永真美 (2020) 「フランスのマンガ出版社が日本オフィスを開設した理由—独立系出版社 AC メディア (キューン) のケーススタディ」『昭和女子大学現代ビジネス研究所 2019 年度紀要』

豊永真美 (2021) 「コロナ禍のフランスのマンガ市場」『昭和女子大学現代ビジネス研究所 2020 年度紀要』

豊永真美 (2022) 「『文化クーポン』で急拡大したフランスのマンガ市場」『昭和女子大学現代ビジネス研究所 2021 年度紀要』

豊永真美 (2023) 「フランスからマンガを「逆輸出」する～AC メディアの挑戦～」『昭和女子大学現代ビジネス研究所 2022 年度紀要』

三原龍太郎・豊永真美(2022)『「日本から」「日本語へ」—マンガの国境をこえた展開に係る在仏マンガ出版社 Ki-oon のケーススタディ』「マンガ探求 13 講」(水声社)

トーマス・ラマール著上野俊哉監訳大崎晴美訳(2023)『アニメ・エコロジー—テレビ、アニメーション、ゲームの系譜学』(名古屋大学出版会)

Centre National du Livre. (2021) Panorama de la BD en France 2010-2020.  
<https://www.bd2020.culture.gouv.fr/actualites/panorama-de-la-bd-en-france-2010-2020>

(2023 年 1 月 20 日閲覧)